

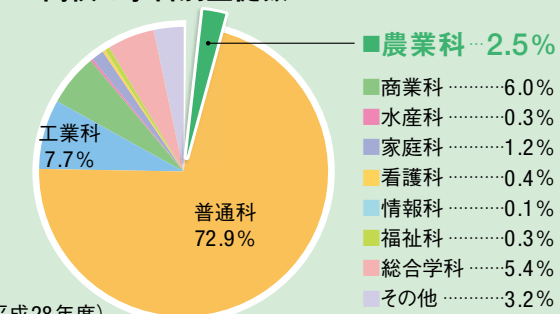
■農業科の女子率

平成28年度 **49.0%**

平成8年度 **34.3%**

出典：文部科学省「学校基本調査」（平成28年度）

■高校の学科別生徒数（本科：全国3,299,599人）



特集1

自然を敬い、地域に学ぶ、未来を担う若者たち

農業高校



■農業高校における授業科目

区分	科目
農業の各分野に共通する内容をもつ科目	農業と環境、課題研究、総合実習、農業情報処理
主として農業の経営と食品産業に関連する分野の科目	作物、野菜、果樹、草花、畜産、農業経営、農業機械、食品製造、食品化学、微生物利用、農業経済、食品流通
主としてバイオテクノロジーに関連する分野の科目	植物バイオテクノロジー、動物バイオテクノロジー
主として環境創造と素材生産に関連する分野の科目	森林科学、森林経営、林産物利用、農業土木設計、農業土木施工、水循環、造園計画、造園技術、環境緑化材料、測量
主としてヒューマンサービスに関連する分野の科目	生物活用、グリーンライフ

資料：文部科学省
「高等学校教育の改革に関する推進状況」など

■特徴的な学科名と学校設定科目

学科名・科目	設定している高校の例	内容
動物科	園芸高校（東京都）	ペットの飼育・活用に必要な知識・技術などを学ぶ。動物飼育、看護・美容分野に進む生徒が多い。
森林クリエイト科	那賀高校（徳島県）	実践的な森林施業を学習。2017年度から「小型無人機ドローン」の操縦実習を取り入れる。
グリーンライフ科	八代農業高校泉分校（熊本県）	自然と人間生活の調和に関する体験的学習（キャンプ、カヌー、マウンテンバイクなど）の実習がある。
熱帯農業科	北部農林高校（沖縄県）	畜産ではアグー、栽培ではマンゴーやサトウキビなど地元産品が中心。飼育・栽培の授業・実習を行う。
生産科学科「馬学」	静内農業高校（北海道）	全国で唯一の競走馬の生産に関する学習を行い、馬の生産や育成、調教に関する知識と技術を習得する。
生物生産科「飛騨牛」	飛騨高山高校（岐阜県）	地元畜産農家の協力も得、飛騨牛の繁殖から肥育、出荷までの知識・技術を学ぶ。2018年度から設定。
食品科学科「酒類醸造」	田布施農工高校（山口県）	日本酒の醸造を酒米生産から一貫して学習できる唯一の高校。酒造実習は1957年から続けられている。



今、農業高校が大きく変化しています。就職・就農に即した特徴的かつ実践的な授業内容で女子人気が高まっているほか、グローバル化、経営力強化に取り組み農業高校が増えています。

取材：文／葵和みどり（P4～5）、下境敏弘（P6～9）、千葉貴子（P10～13）
撮影／島誠（P6～9）



さらに、学校内にとどまらず、より実践的に地域農業に学ぶ授業や、校内で生産した農産物の6次産業化、世界を視野に入れた農業分野のグローバルリーダーの育成に取り組む農業高校もあります。

大学・専門学校への進学率も高まる中、高校卒業後すぐに就農する生徒は少ないですが、幅広い視点で実践的に学び、新世代の農業を支える若者が農業高校から巣立っていくことが期待されます。

一昔前と比べ、農業高校のイメージはかなり違います。全国の高校の学科別生徒数で見れば、わずか2・5%の約8万2000人ですが、その約半数が女子。20年前と比べ、女子比率が大きく高まりました。要因の一つとして、授業で学習する科目内容が幅広くなったことが影響していると言われています。例えば東京都園芸高校では、ペットトリマーやフラワーデザイナーといった女子に人気の高い職業に関連する科目があります。また、地域の特性を活かした特徴的な科目を設定している学校もあり、北海道 静内農業高校では、全国で唯一、競争馬の生産について学んでいます。

女子人気が話題の農業高校
経営者育成の取り組みも

森林
科学科

高性能の大型林業機械操作実習。森林資源を有効に活用できる人材を育てる。

生活
科学科

津軽鉄道の車内販売実習。生活文化の向上に寄与できる人材を育てる。

世界的な基準に照らして五農の果樹園運営が適切であることを第三者機関に認証してもらう。この試みに挑むメンバーを募集したところ、15名が名乗りを上げました。認証の対象としたのは青森県が日本一の生産量を誇るりんご。具体的には、ふじを中心とする約900本の樹がある1・6haの農園と約300㎡の貯蔵施設です。チェック項目は、農産物の安全や環境への配慮、労働安全対策など234。生徒たちは試行錯誤し

これからの生産者は海外市場の開拓を視野に入れる必要がある。そう考えた山口章校長は、日本の農林業をけん引する人間に育ってほしい。また、若い世代に世界の扉を開いてほしいとの思いから、欧州小売業組合が策定した農産物の国際規格であるグローバルGAP (Good Agricultural Practices) へのチャレンジを教育の一環として位置づけました。

教育機関として世界初の「アワード」を受賞

校である同校では、約500人の生徒がそれぞれの将来に向かって学んでいます。例えば森林科学科では、県産業技術センター林業研究所が開発を進める無花粉スギの育成を行うなど、未来の産業の担い手たちは新しい技術への挑戦に前向きです。

ながら一つずつ対策を講じていきました。

同校を訪れた審査員の8時間にわたる審査をクリアし、2015年12月に認証書が交付されました。認証は県内で3件目、高校としては全国初でした。

しかも2016年には、認証者の中で顕著な成果を挙げた団体として「アワード（大賞）」を受賞しました。教育機関が単独で受賞したのは世界初の快挙でした。さらに生徒たちはノウハウやマーケティングを学んだうえで、一事業者として今年1月、中国四川省成都市の百貨店の店頭に立ち、自分たちで育てたりんごを販売しました。世界を舞台にした五農生のスケールの大きな挑戦が続いています。

かんがい
地下灌漑工事実習。環境と調和した活力ある地域をつくる人材を育てる。

食品
科学科

マーマレードの製造実習。1年次から食品製造に取り組むなど実践を重視。

環境
土木科生物
生産科

市場視察。津軽名産の「つがりあんメロン」や五農米などの栽培も重要な勉学の一つ。

青森県 五所川原農林高校

生物生産科／森林科学科
環境土木科／食品科学科／生活科学科

青森の宝、りんごで拓く未来！ 世界を舞台にした五農生の挑戦

世界の教育機関で初めて国際的な第三者認証制度の大賞を受賞するなど、青森県の農林業の未来を担う若者たちは充実した高校生活を送っています。



五所川原農林高校産のりんごでグローバル GAP の認証取得や中国での販売実習にチャレンジしたメンバー。

右／オランダで開かれたグローバル GAP アワードの授賞式には6人の生徒が出席した。左／中国での販売実習。生徒たちは中国語と輸出実務の研修を経て、自ら書類を作成し現地に立った。



国際的な次世代農業 経営者を育てる

日本有数の広大な敷地を有する青森県 五所川原農林高校。岩木山を望む津軽平野に広がるその校地は52haもあり、森や池が点在し、実習用の水田や畑、牧草地は広々としています。

1902年に設立された北津軽郡立農学校を前身とする同校は、2010年の学科再編で、生物生産科、森林科学科、環境土木科、食品科学科、生活科学科の5科になりました。

津軽地域における農業系の拠点

菊水寮内の食堂。農業経営者育成高校に指定されているため、生物生産科、生活科学科の生徒には入寮義務がある。

